

*** 東京天文台百年記念誌資料―その3-18-⑥～⑩― 帝国大学年報の東京天文台記事
(明治28年～明治32年)**

筆者が引き継いだ東京天文台百年記念誌資料については、アーカイブ室新聞346号に「東京天文台100周年記念誌作成時の資料―その1―」、349号に「東京天文台100周年記念誌作成時の資料―その2―」、353号に「東京天文台100周年記念誌作成時の資料―その3―」、という記事を書いた。これらの資料は段ボール箱3個に入っていたので1箱目を―その1―、2箱目を―その2―、3箱目を―その3―としたのである。これらの資料についてリストのみでなく、内容を具体的に紹介する記事を書き始めたが、順不同で筆者が興味深いものかかってピックアップして書いている。今回は3箱目の18項目について報告したい。第353号のリストには、48項目のリストがあり、それぞれの項目に更に多いものは23件のサブリストがある。今回は3箱目の18項目目に、

18. 帝国大学年報、東京天文台年報と書かれた封筒

- ① 帝国大学第3年表 明治21年度、第5年表 明治23年度のメモあり
- ② 第6年報 明治24年 (曆書調製)
- ③ 第7年報 明治25年 (天象観測及び曆書調製)
- ④ 第8年報 明治26年 (1) 東京天文台 天象観測、(2) 曆書調製、(3) 天文器械
- ⑤ 第9年報 明治27年 (1) 関係ない農学、(2) 曆年間天文器械、(3) 曆書調製、(4) 天文器械
- ⑥ 第10年報 明治28年度 (1) 天象観測、(2) 曆書調製
- ⑦ 第11年報 明治29年 (1) 天象観測、(2) 曆書調製、(3) 天文器械
- ⑧ 第12年報 明治30年 (1) 天象観測、(2) 天文器械
- ⑨ 第13年報 明治31年 同上
- ⑩ 大学第14年報 明治32年 理科大学附属東京天文台
- ⑪ 大学第16年報 明治34年 東京天文台
- ⑫ 大学第17年報 明治35年 東京天文台
- ⑬ 大学第21年報 明治39年 東京天文台
- ⑭ 第23年報 明治41年 東京天文台
- ⑮ 第24年報 明治42年 東京天文台
- ⑯ 第25年報 明治43年度 東京天文台
- ⑰ 第26年報 明治44年度 東京天文台
- ⑱ 第27年報 明治45年度 東京天文台
- ⑲ 第40年報 大正14年度

⑩ 第 41 年表 大正 15 年度

この号では、

⑥ 第 10 年報 明治 28 年度(1)天象観測、(2)曆書調製

⑦ 第 11 年報 明治 29 年(1)天象観測、(2)曆書調製、(3)天文器械

⑧ 第 12 年報 明治 30 年(1)天象観測、(2)天文器械

⑨ 第 13 年報 明治 31 年 同上

⑩ 大学第 14 年報 明治 32 年 理科大学附属東京天文台

について、具体的にその内容を報告したい。

⑥ 第 10 年報 明治 28 年度

東京天文台

天象観測

明治 28 年 1 月より同 12 月に至る一暦年間に於ける天象観測事業は明治 22 年以来施行する諸星の赤経と赤緯の観測及び時辰儀示針差測定の観測は他の業務の間に於いて助手渡部恒同水原準三郎等尚ほ継続せり

又明治 25 年に於いて施行せし東京長崎間及東京横浜間の経度測量と本臺緯度の観測及び火星の衝の観測は皆共に其報告書原稿完成せしも本臺緯度の観測は猶ほ再査を要する箇所あるにより目下調査中なり

本暦年間天文器械の充用は左の如し

第一 子午儀

第二 子午環

第三 赤道儀

第四 赤道儀 此儀室改築落成の後ち室の屋根に雨漏を生じ修理を尽くすと云えども未だ雨漏り止まらざるを以て該儀を装置するを得ず

第五 経緯儀 此儀室亦た第四赤道儀室と等し

曆書調製

明治 28 年 1 月改始以後前年の業務を継続し明治 29 年曆の推算と其編輯とに従事し来年 2 月を以て略本曆の編輯を完成し 3 月に至って本曆の編輯を結了せり以て各曆を浄写し俱に之を頒行曆原本となし略本曆は 3 月 22 日本曆は 4 月 12 日を以て之を神宮司廳に交付するの順序をなせり而して同月以後は更に復た明治 30 年曆の推算に従事し 12 月末に至り略本曆の推算は略完成し本曆はその九分を推算せり

正午時通報

明治 28 年 1 月 1 日以来同 12 月 31 日に至るの一暦年間毎日正午時の通報は前年と同じく陸軍逋信二省及び中央气象台の依頼を継続し厳密以て之が時刻を通報したり

⑦ 第 11 年報 明治 29 年(1)天象観測、(2)曆書調製、(3)天文器械

東京天文台

天象観測

明治 29 年 1 月より同 12 月に至る一暦年間に於ける天象観測事業は明治 22 年以来施行する諸星の赤経と赤緯の観測及び時辰儀示針差測定の観測は他の業務の間に於いて助手水原準三郎助手松崎故一郎等尚ほ継続せり

又明治 25 年に於いて施行せし東京長崎間及東京横浜間の経度測量と本臺緯度の観測及び火星の衝の観測は皆共に其報告書原稿完成せり然れども本臺緯度の観測は猶ほ再査を要する箇所あるに由り再調査に従事す

明治 29 年 8 月 9 日皆既日食の北海道中にあるを以て其観測を為すがため臺長理科大学教授寺尾寿理科大学助手平山信助手水原準三郎及助手松崎故一郎等北海道出張を命ぜられ一行に二手に分かれ一は釧路国厚岸に一は北見国枝幸に各観測場を設けたれども当日濃霧又は曇天のため両所とも観測を果たさざりし

本暦年間天文器械の充用は左の如し

第一 子午儀

第二 子午環

第三 太陽写真儀

第四 天体写真儀 本器械は未だ時計仕掛装置の設けあらざれを以て日食観測後は未だ使用せず

第五 赤道儀

第六 赤道儀 此儀室改築落成の後其屋根に雨漏を生じ修理を尽くすと云えども未だ雨漏り止まざるを以て該儀を装置するを得ず

第七 経緯儀

本暦年間に於いて天象観測の景況は概略前述の如くなり

曆書調製

明治 29 年 1 月改始以後前年の業務を継続し明治 30 年曆の推算と其編輯とに従事し来年 2 月を以て略本曆の編輯を完成し 3 月に至って本曆の編輯を結了せり以て各曆を浄写し俱に之を頒行曆原本となし略本曆は 3 月 22 日本曆は 4 月 12 日を以て之を神宮司廳に交付するの順序をなせり而して同月以後は更に復た明治 31 年曆の推算に従事し 12 月末に至り略本曆の推算は略完成し本曆はその九分を推算せり

正午時通報

明治 29 年 1 月 1 日以来同 12 月 31 日に至るの一暦年間毎日正午時の通報は前年と同じく陸軍逋信二省及中央气象台の依頼を継続し厳密以て之が時刻を通報し更に誤謬なく其義務を果たせり

天文器械

明治 29 年 12 月末日に天文器械の現在数は総計一百五十個なり之を前暦年末の現数に比すれば其増加せること二個而して本暦年間に在ては減じたるものなし左に表を付して其在来数と現在数とを示す

教室名称	品名	在来数	増数	減数	現在数
東京天文台	天文器械	148	1	0	149

⑧ 第 11 年報 明治 29 年(1)天象観測、(2)曆書調製、(3)天文器械

東京天文台

天象観測

明治 30 年 1 月より同 12 月に至る一暦年間に於ける天象観測事業は明治 22 年以来施行する諸星の赤経と赤緯との観測及び時辰儀示針差測定の観測は他の業務の間に於いて助手水原準三郎助手松崎故一郎等尚ほ継続せり

又明治 25 年に於いて施行せし東京長崎間及東京横浜間の経度測量と本臺緯度の観測及び火星の衝の観測は皆共に其報告書原稿完成せしを以て印刷して之を海外諸天文台等へ配布せり然しども本臺緯度の観測は猶ほ再査を要する箇所あるに由り再調査に従事す

明治 31 年 1 月インド孟買附近の地に皆既日食あるがため其観測員派遣の挙あり臺長理科大学教授寺尾寿理科大学教授平山信該地へ派遣せられ助手水原準三郎嘱託員木村榮各随行を命ぜられ本年 11 月 16 日日本郵船会社汽船広島丸にて横浜を出発し 12 月 20 日孟買に着し該地に於いて観測準備に従事せり

本暦年間天文器械の充用は左の如し

- 第一 子午儀
- 第二 子午環儀
- 第三 太陽写真儀
- 第四 天体写真儀
- 臺六 経緯儀

本暦年間に於ける天象観測の景況は概略前述の如くなり

曆書調製

明治 30 年 1 月政治（改始の誤り）以後前年の業務を継続し明治 31 年曆の推算と其編輯とに従事し来年 2 月を以て略本曆の編輯を完成し 3 月に至って本曆の編輯を結了せり以て各曆を浄写し俱に之を頒行曆原本となし略本曆は 3 月 27 日本曆は 4 月 19 日に於いて神宮司廳に交付せり而して同月以後は更に復た明治 32 年曆の推算に従事し 12 月末に至り略本曆の推算は略ほ完成し本曆はその九分を推算せり

正午時通報

明治 30 年 1 月 1 日以来同 12 月 31 日に至る一暦年間毎日正午時の通報は前年と同じく陸軍通信二省及中央气象台の依頼を継続し厳密以て之が時刻を通報し更に誤謬なく其義務を果たせり

天文器械

明治 30 年 12 月末日に於ける天文器械の現在数は総計一百五拾壹個にして之を前暦年末の現在数に比すれば其増加せるの貳個而の本暦年間に在ては減じたるものなし左に表を付して其在来数と現在数とを示す

教室名称	品名	在来数	増数	減数	現在数
東京天文台	天文器械	149	2	0	151

⑨ 第 13 年報 明治 31 年 同上

東京天文台

天象観測

明治 31 年 1 月より同 12 月に至る一暦年間に於ける天象観測事業は時辰儀示針差測定
の観測にして助手水原準三郎助手松崎故一郎等従事せり又潮汐時刻計算法調査事業を起
こし助手水原準三郎専らこれに従事せり

又明治 30 年 11 月 16 日印度へ向け出発せし台長理科大学教授寺尾寿理科大学教授平山
信助手水原準三郎及囑託木村榮の一行は皆既日食観測事業を終え本年 3 月 9 日帰朝せり

本暦年間天文器械の充用は左の如し

第一 子午儀

第二 子午環儀

第三 太陽写真儀

第四 天体写真儀

第五 赤道儀

臺六 経緯儀

本暦年間に於ける天象観測の景況は概略前述の如くなり

曆書調製

明治 31 年 1 月政治（改始の誤り）以後前年の業務を継続し明治 32 年曆の推算と其編輯
とに従事し来年 2 月を以て略本曆の編輯を完成し 3 月に至て本曆の編輯を結了し以て各曆
を浄写し俱に之を頒行曆原本となし略本曆は 3 月 30 日本曆は 4 月 22 日に於て神宮司廳に
交付するの順序を為せり而して同月以後は更に復明治 33 年曆の推算に従事し 12 月末に至
り略本曆の推算は略ほ完成し本曆はその九分を推算せり

正午時通報

明治 31 年 1 月 1 日以来同 12 月 31 日に至る一暦年間毎日正午時の通報は前年と
同く陸軍 逓信二省及中央气象台の依頼を継続し厳密以て之が時刻を通報し更に誤謬なく其義務を果
せり

天文器械

明治 31 年 12 月末日に於ける天文器械の現在数は総計一百五十二個にして之を前暦年末
の現在数に比すれば其増加せること一個而して本暦年間に在ては減じたるものなし左に表
を付して其在来数と現在数とを示す

教室名称	品名	在来数	増数	減数	現在数
東京天文台	天文器械	151	1	0	152

この第13年報の書式が踏襲されたものである、そのコピーを示しておく

東京天文臺	
天象觀測	
明治三十一年一月ヨリ同年十二月ニ至ル一曆年間	ニ於ケル天象觀測事業ハ時辰儀示針差測定ノ觀測
ニシテ助手水原準三郎同松崎故一郎等從事セリ	又潮汐時刻計算法調査事業ヲ起シ助手水原準三郎
專ラ之ニ從事セリ	又明治三十年十一月十六日印度ヘ向ケ出發セシ臺
長理科大学教授寺尾壽理科大学教授平山信助手水	原準三郎及囑託員水村榮ノ一行ハ皆既日食觀測事
業ヲ終ヘ本年三月九日帰朝セリ	本曆年間天文器械ノ充用ハ左ノ如シ
第一 子午儀	
第二 子午環儀	
第三 太陽寫真儀	
第四 天體寫真儀	
第五 赤道儀	
第六 經緯儀	
本曆年間ニ於ケル天象觀測ノ景況ハ概略前述ノ如	

東京天文台					天文器械					一五二					一					減					。數					現在數					一五二																																																																										
教室名稱					品名					在來數					增					數					減					數					現在數																																																																										
天文器械					一五二					一					減					。數					現在數					一五二																																																																															
數ト現在數トヲ示ス					在テハ其減シタルモノナシ左ニ表ヲ付シテ其在來					ニ比スレハ其増加セルコト一個而シテ本曆年間ニ					數ハ總計百五十二個ニシテ之ヲ前曆年末ノ現在數					明治三十一年十二月末日ニ於ケル天文器械ノ現在					天文器械					カ時刻ヲ通報シ更ニ誤謬ナク其義務ヲ果セリ					至ル一曆年間毎日正午時ノ通報ハ前年ト同ク陸軍					通信ニ省及中央氣象臺ノ依頼ヲ繼續シ嚴密以テ之					明治三十一年一月一日以來同年十二月三十一日ニ					正午時通報					算セリ					至リ略本曆ノ推算ハ略ホ完成シ本曆ハ其九分ヲ推					降ハ更ニ復三十三年曆ノ推算ニ從事シ十二月末ニ					神宮司廳ニ交付スルノ順序ヲ為セリ而シテ同月以					シ略本曆ハ三月三十日本曆ハ四月二十二日ニ於テ					ヲ結了シ以テ各曆ヲ淨寫シ俱ニ之ヲ頒行曆原本ト					以テ略本曆ノ編輯ヲ完成シ三月ニ至テ本曆ノ編輯					三十二年曆ノ推算ト其編輯トニ從事シ本年二月ヲ					明治三十一年政治始以後前年ノ業務ヲ繼續シ明治					クナリ					曆書調製				

① 大学14年報 明治32年 理科大学附属東京天文台
理科大学附属東京天文台

本年1月より12月に至る一曆年間に於ける天象の観測及潮汐の時刻計算法調査等は略く前年と異なることなし而して本曆年間天文器械を充用せるは子午儀、子午環儀、太陽写真儀、天体写真儀、赤道儀、経緯儀なり

曆書の調製は本年1月以来前年の業務を繼續し明治33年曆の推算と其編輯とに従事し本年2月を以て略本曆の編輯を完成し3月に至り本曆の編輯を結了せり次て各曆を淨寫し共に之を頒行曆の原本とし略本曆は3月31日本曆は4月19日に神宮司廳に交付せり而して同月以降は更に復明治34年曆の推算に従事し12月末に至り略本曆の推算は略く完成し本曆はその九分を推算せり

毎日正午時の通報は前年と同く陸軍省通信省及び中央氣象台よりの依頼を繼續し嚴密之を通報し誤謬なく其義務を果せり

本年12月末日に於ける天文器械の現在數は総て百五十二個にして前年と異なることなし

の明治32年年報の書き方は、従前の記載法と異なっており、原本コピーを示しておく。

十四日
三十三日

ナリトス

理科大学附属東京天文臺

本年一月ヨリ十二月ニ至ル一曆年間ニ於ケル天象ノ觀測及ヒ潮汐ノ時刻計算法調査等ハ略ク前年ト

異ナルコトナシ而レテ本曆年間天文器械ヲ充用セ
ルハ子午儀、子午環儀、太陽寫真儀、天體寫真儀、赤道儀
經緯儀ナリ

曆書ノ調製ハ本年一月以來前年ノ業務ヲ繼續シ明
治三十三年曆ノ推算ト其編輯トニ從事シ本年二月
ヲ以テ略本曆ノ編輯ヲ完成シ三月ニ至リ本曆ノ編
輯ヲ結了セリ次テ各曆ヲ淨寫シ共ニ之ヲ頒行曆ノ
原本トシ略本曆ハ三月三十一日本曆ハ四月十九日
ニ神官司廳ニ交付セリ而レテ同月以降ハ更ニ復三
十四年曆ノ推算ニ從事シ十二月末ニ至リテ略本曆
ノ推算ハ略ク之ヲ完成シ本曆ハ其九分ヲ推算セリ
毎日正午時ノ通報ハ前年ト同シク陸軍省、逓信省及
ヒ中央氣象臺ヨリノ依頼ヲ繼承シ嚴密ニ之ヲ通報
シ誤謬ナク其義務ヲ果セリ
本年十二月末ニ於ケル天文器械ノ現在數ハ總テ百
五十二個ニシテ前年ト異ナルコトナシ

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp